

はじめに

この報告書は、長野県環境保全研究所の研究プロジェクト「信州の里山の特性把握と環境保全のための総合研究(2001年度～2005年度)」の研究成果をとりまとめたものである。当プロジェクトにおける里山の定義と研究目的、研究方法は以下のとおりである。

里山の定義：

ここでいう里山とは「農林業を主体とした人の暮らしを支えるある広がりをもった地域であり、暮らしや生産活動の影響下に成立した二次的自然の総体」を指す。付帯的な説明として「里山は雑木林、植林地、草地、農地、ため池、水路、集落といった多様な環境から構成される」。

つまり里山は「地域」であり、そこに展開する自然環境は里山の一要素として、概念上区別する。また植林地(人工林)については、身近でかつ重要な自然環境であり、長野県土の約25%の面積を占めることから、里山の自然に含めて取り扱うことにした。

研究目的：プロジェクトの目的は以下の3つに集約される。

- (1) 長野県の里山の現状を調査し、その特性を把握すること
- (2) 長野県の里山のもつ魅力を掘り起こすこと
- (3) 里山における環境保全のための課題を整理し、今後の取り組みのための展望を開くこと

研究方法：プロジェクト全体で前期と後期に分けられる。

—前期 2001年度～2002年度—

県北部の飯縄山南東麓地域(浅川地域)を重点調査地に設定し、里山を構成する諸要素について、それらの空間的な相互関係や、時系列的な変化を調査し、里山としての特性や課題を整理した。この研究方法と中間成果報告については、「研究プロジェクト成果報告 1」(長野県自然保護研究所編、2003)として公表した。

—後期 2003年度～2005年度—

調査地域を長野市西方の虫倉山南麓地域ならびに全县に拡大し、浅川地域と一部比較をしながら信州の里山の特徴をまとめ、個々の分野の調査研究を深めた。

報告書の構成：本報告書は以下の3つの章から構成される

- ・第I章 プロジェクトの総括と提言(成果のまとめ)
- ・第II章 個々のサブテーマによる研究成果報告(11題の論文)
- ・第III章資料編 里山保全に関連する資料・調査記録

今日の里山をめぐる諸問題は、様々な生物の保護・保全から、地域の歴史や文化の継承、そして産業構造の変化に関する事象まで、じつに幅広い。そのため現状を把握するにあたって、問題を特定の専門枠内に限定せず、多分野の専門研究スタッフの協力のもとに、できるかぎり総合的に里山を把えることとした。ただし、相互に関連しあい、しかも長い歴史を背負っている里山の事象を網羅することは困難で、たとえば農林業における施業方法の違いが里山の動植物に与える影響など、今回十分に扱うことができなかった事象も残されている。

全国的にも里山の環境保全に関心が集まる中、里山とよばれる地域には多くの共通性があると同時に、里山ごとに違いや独自性があることがわかってきた。長野県内の里山には、長野県独自の特徴がある。そして、それが信州の里山の価値や魅力にもむすびついている。そのため、本報告書では里山一般に共通する問題については、一編の論文として要点の整理をおこなうにとどめ、全体的には信州の里山だからこそといえるような、特徴や現状に関する記載に重きをおいた。既往の文献などを見ると、包括的な意味での「里山」という言葉のもとに、特定の対象地域や個別の生物種などについて詳しく記述される例が多い。その点このプロジェクトでは、対象とする範囲を県という比較的大きなスケールでとらえ、地域の自然環境や社会環境の諸特徴をできるだけ他の事象との関連のもとに整理・考察し、とりまとめるという方針をとった。

なお、里山を考察する際のスケール（縮尺）の取り方には多くの課題がある。たとえば、ある特定の野生生物を対象にすると、その生物種の生態や得られるデータの特性に応じた固有の空間スケールで議論が行なわれる。そのため、対象が異なると議論のスケールそのものが違ってしまい、それによって相互関連の考察や研究の総合化が困難になることが多い。また比較的小さい範囲の田や畑、あるいはため池や森林など、特定の土地利用が行われている範囲内で議論が収束してしまいやすく、諸要素の相互関連を集落や流域規模にまで発展させて考察することは容易なことではない。じつはこのようなスケールの扱いに起因する総合化の難しさについては、プロジェクトの開始段階からすでに意識されていた（「研究プロジェクト成果報告1」（長野県自然保護研究所編，2003））。しかし結果的には、本報告書をまとめるにあたっては、この空間的・時間的な多段階のスケールをとりこんだ総合化の壁はとて克服できたとはいえず、残念ながら今後の課題とせざるをえない。

「里山」と「里山の自然」は、そこに人の暮らしがある限り、未来に向かって続いてゆくものである。時代の変化とともに失われてしまうものがある一方で、生き物のように再生と変化、あるいは進化をつづけてゆく部分がある。将来を見すえた「里山」の環境保全とは、つまるところ環境配慮型の地域づくりそのものといってよい。調査や考察の行き届かなかった部分が残されているとはいえ、この報告書には、信州の里山についての新たな知見やオリジナルな視点が盛り込まれている。それらは執筆者それぞれが専門性を発揮し、直接現場から拾いあげてきたものである。信州のフィールドから生まれた本報告書が、各地の今後の地域づくりのために、具体的なヒントをもたらす、少しでも役に立つことを願っている。また、この内容に関するご意見やご感想、ご質問、あるいは率直なご批判などが多くの方からいただけることを期待したい。里山の環境保全につながる研究と実践は、これで終わるわけではなく、テーマは変わっても、よりよい里山環境の創造のために、今後もさらに微力を尽くしていきたいと念じている。

プロジェクトの実施にあたっては、途中2004年の春に研究所組織の改変があり、研究体制にも一部変化が生じた。そのなかで、調査研究の継続を支えていただいた所内外の関係者にお礼を申し上げます。さらに、個別の成果報告にも記されているように、調査の過程で県内各地の自治体や関連組織、そして多くの市民やボランティアの方々のご協力を得た。参考にさせていただいた文献等も多数にのぼる。これら貴重な情報をいただき、また献身的に調査にご協力をいただいた多くの方々にたいし、心より感謝を申し上げます。

2006年3月

プロジェクトを代表して 富樫 均

目次

口 絵

はじめに

I 信州の里山の特性把握と環境保全のための提言

1 信州の里山の特性	3
2 里山の現状と課題	11
3 信州の里山の価値と可能性	17

II 個別のテーマによる調査・研究成果報告

1 里山の何が問題なのか—里山問題の概観—	23
2 土地利用変化に伴う植生への影響	29
3 信州の里山にみられる希少植物	39
4 マルハナバチの分布からみた信州の里山	45
5 里山の鳥類と里山環境—浅川地域及びその周辺におけるサシバの生息状況—	51
6 巻き枯らし（環状剥皮）を用いた雑木林のビオトープ創出と樹木管理手法の検討	57
7 里山と大型哺乳類～特にツキノワグマについて～	67
8 長野県の里山における土地利用変化とその要因	71
9 暮らしからみた昭和20年代の資源利用とその変化—中条村伊折を事例に—	77
10 語りからみた戦前の信州の里山の暮らし	83
11 立地からみた信州の里山の類型区分	89

III 資料編

資料-1 ユニークな里山保全活動に関する調査表	99
資料-2 里山を味わうためのプログラム開発—新しい観察会の可能性—	113
資料-3 里山にたいする住民の意識に関するアンケート調査結果	118
資料-4 木質系バイオマスエネルギーの供給地としての里山の可能性について	125
資料-5 里山の環境保全に関連がふかい県の主な事業（平成17年度）	127
資料-6 中条村の植物目録	135

研究プロジェクトのメンバーとI章とIII章の執筆分担